

近藤芳樹の活動拠点としての広島

久保田 啓 一

はじめに

山口県文書館に蔵される吉田祥朔氏筆写「近藤芳樹日記」(以下、「日記」と略す)の翻刻を継続して、現在嘉永四年(一八五二)末に至っている。年によって欠落があったり、記事に著しい繁簡精粗の差が存するなど、いささか当惑させられもするが、ほぼ日次に近い精度で一国学者の動向が明らかになることに對する興味は尽きず、吉田氏の細字を辿る作業にも倦むことがない。

その過程で、芳樹という人物に関して一つの思いが生じた。それは、芳樹はなぜ各地に知人・援助者・門人をいとも容易に作ることができるのかという根本的な疑問である。そもそも近世後期の国学者のほとんどは、幕府や藩に仕えて安定した身分を得るなどということではなく、家業の余暇の勉強で我慢できなければ、富豪の援助を頼むか、個人で塾を開いて門人を集めるか、地方を回って和歌・

国学を教授しつつ謝礼を稼ぐか、いずれにせよ不安定な立場で生活と学問の両立を図らなければならなかった。芳樹は、天保十一年(一八四〇)四十歳で萩藩士の近藤家に養子として入り、和学御用を命じられるという僥倖に恵まれたが、それまでは誰に仕えるわけでもない自由業であった。人脈が彼らの活動の原動力であるのは常識として納得しても、芳樹の場合、その能力は異例というべきではないのか。そのような思いが、「日記」に登場する人々の無限の広がりを目の当りにする中で形を成しつつある。

本稿で明らかにしたいのは、異郷の地で国学者の看板を立てた芳樹が新たな人脈作りのために駆使した方法とはどのようなものであったのか、その過程で芳樹が漏らす、「日記」や書簡などに示される本音と、公刊された著書に表われる建前との間隙を、どのように意味づけ、埋めることができるのかということ、そしてそこから総体としての芳樹像をどう結べばよいのかという点である。事例と

しては、拠点のひとつであった広島への進出を扱う。主たる活動の場であった上方と郷里の周防との間に位置する広島は、学芸界の規模においても、西国一円から学に志す者が蟻集する京坂と、周防の一辺陬に過ぎない郷里岩淵（現在の防府市）との中間的存在といつてよい。そのような広島に芳樹が進出を試みる理由は何かを探る中で、芳樹の意識を把握することができれば、本稿の目的は達せられたいこととなる。

—

芳樹は、広島の地に初めて足を踏み入れた頃のことを回想して、『寄居歌談』卷三に次のように語っている。

おのれ広島にはじめてまかりしは、はたとせあまりもむかしのことなりき。まだいとわかくて名をも知らぬほどなりしかば、やどりとひくる人もなく、いとつれづれなりけるに、ある人、白蔵主の多たづさへ来て歌をこへり。やがて筆さしぬらして、

はかなしやこれもおよびのうごきしをうれしきさがとおもひ
よるらん

とかきつたりけり。こは左伝なる食指のうごきしといふふる事をとりてよめるなり。されど、いかにせん、うた聞しるべき人は漢ぶみの学びうとく、またさえのかたひでたる人は歌の事

にたどくしければ、たれひとりこのうたに眼とむむる人もなかりけるに、頼杏坪の翁つたへ聞いて、「こは云々のふることを取れるなり。心にくき歌よみかな。」といはれしより、府下こそりておのれをもてはやしの、しること、なりにけり。さるは、おのが身のうへのむかしがたりをかうかき出るも、いかにぞや、をこがましく聞ゆめれど、さりとしてこの翁のすぐれたる有識なりしことこそ世にもしるけれど、かくこの道にさへおりたち居られけんほどをば、をさくしれる人もあるまじうおぼゆるまゝに、そのよししるしおかまほしくて、しらずく自賛にさへ及ぼせるなりけり。よまれたる歌どもの中にも、ひとふしありてめづらしとおもはるゝがおほし。詠草の中よりひとつふたつこゝにぬきいづ。〈以下略〉²⁾

冒頭に「おのれ広島にはじめてまかりしは、はたとせあまりもむかしのことなりき」とある、「はたとせあまりもむかし」の特定が可能であれば、芳樹の広島進出の時期もおのずと明らかにするが、これまでの研究では確定されていない。例えば、芳樹の伝記資料の集成に精励した吉田祥朗氏に『近藤芳樹大人日譜草稿』（山口県文書館吉田樟堂文庫蔵）と題する年譜があるが、天保二年（一八三二）四月に頼山陽の母梅颯が広島で芳樹の源氏物語講釈を聴講した旨、「梅颯日記」に拠って立項されるのが、芳樹と広島との関わりを示す最初の記述であり、それ以前に芳樹がどのような手蔓を求めて広

島の地に入ったのかは皆目知られない。

ただし、この吉田氏の考証によって、遅くとも天保二年までには芳樹が広島に拠点を構えていたことは確実と判断され、揖斐高氏や「影山純夫氏³」が、孫の近藤久敬撰「先大人寄居府君行状」「寄居大人伝」に従って、天保初めに『芸州蔽島図会』編纂に協力するため広島に住んだとする見解とも符合する。

しかし、『寄居歌談』巻三が宇佐美喜三八氏⁵の説の通り弘化元年（一八四四）に成立刊行されたとして、その時点から遡ること足掛け二十年以上となれば、文政八年（一八二五）よりも前に、早くも頼杏坪の知遇を得て広島における知名度が一挙に上がったことになり、二十代前半の国学研鑽中の若者の逸話としてはいささか出来過ぎの感が否めないのも事実である。この時期の芳樹は大坂・京・和歌山を主な活動の場としており、広島の地に確たる本拠を築くのもう少し後なのではないかという疑問を抱かざるを得ないのだが、後年の出来事が初めての広島滞在時の記憶に混入した可能性もあって、「自賛」を自然に演出しようとする芳樹の意図的な捏造と断じるわけにもいかない。まずは、芳樹が記す広島進出前後の状況を、他の資料との突き合わせを通じて検証する必要がある。そのためには、他ならぬ『寄居歌談』の成立時期が問われなければならない。「はたとせあまりもむかし」が指し示す大凡の時期を『寄居歌談』巻三の成立から遡って推定する際の前提そのものだからである。

二

そもそも『寄居歌談』は、宇佐美氏が版本の奥付を検討して説を提示し、揖斐氏が追認したような、巻一が天保十三年（一八四二）、巻二が同十四年（一八四三）、巻三が弘化元年という、奥書や刊記の記載通りの定期刊行物ではなかったらしい。「日記」の『寄居歌談』関連の記事を探ってみよう。

天保十四年

○夕つけて紀州の加納よりふみ来れり。歌談に用ふべき説どもかきおくれる也。（七月十一日）

○寄居歌談巻一かきをへぬ。（九月二十八日）

○東条与兵衛、安芸の御廟参すとして今朝出たつ便に、歌がたりを末田勝二郎につかハす。（閏九月二十六日）

○東条与兵衛広しまよりかへれるたよりに、歌がたりのこと、正勝がもとよりいひおこせたり。（十月十九日）

○歌談の事ども広島にいひおくる。蔽島の魚幸がたより也。（十月二十四日）

○広しまより歌談の板下をおくれり。けふ一校をへて、くれて後^{（マ）}島といふくすしがりがりつかハしつ。かれがもとより安芸へたよりあれバなりけり。（十一月二十六日^{（七）}）

弘化三年（一八四六）

○加計の佐々木三郎右工門より鮎の小判がたの粕漬をおくれり。この便に歌がたりのこと井筒やにいひつかはず。(正月二十七日)

○広島より歌がたり初編三十冊来たり。(四月十二日)

○日野良藏長崎へまかるたより二、歌談初篇十冊おくりぬ。(五月十八日)

○けふ紀の加納がもとより文おこせたり。二月ばかりニミヤこ・なにはに遊びて国にかへりたるに、おのれが著ハせる寄居歌談を書肆よりおくれるを見て、いとおもしろさに手をえはなたずなど誉めあさミたる文になんありける。(閏五月六日)

○広島より寄居歌談七十冊来れり。さきに來れるをあハせて百冊也。(八月二十日)

○福川の福田長蔵がり歌談十冊つかハす。(八月二十二日)

○福川の福田長蔵家にかへるよしいとま申に來りぬ。此人に寄居歌談十冊つかハす。さいつ比福川の料とて阿武喜平次がたよりありといへるにつけたれど、まだ彼所にいたらぬよしなれば、長蔵をやがて喜平二がりよせて歌談をとらせたる也。

(九月二日)

○夜にいりて山城やにまかる。さるハ井筒やが子、痘の催しなる由にて広しまより人來たりけれバ、あす帰るべきいそぎするによりて、馬のはなむけのまとゐ、山城やいとなめばなり。

歌談百冊代二百二十目、井筒やにわたしつ。(十月二十五日)

芳樹自身、『寄居歌談』巻一の端書末尾に「天保の十あまり三とせといふとしの冬、寄居子庵ガウナイホの窓のもにてしるしをはんぬ。藤原芳樹」と記し、巻末に「天保のとゝせみとせのしもつきのしもつやみにかきをへぬ。芳樹」と奥書を残していること、そして弘化二年(一八四五)刊とされる三冊本の巻一題簽にある干支「壬寅」から、天保十三年十一月の成立と年内の刊行が疑われることは從來なかつた。ところが、「日記」によれば、天保十四年七月十一日に紀州の加納諸平から「歌談に用ふべき説ども」を書いた手紙を受け取っている。巻一の中には、「橘薫風」題の長歌以下、諸平に関する条項が複数あり、恐らくはそのいずれかがこの日に提供されたのであろう。そのような作業を経た上で巻一を脱稿したのが九月二十八日。閏九月二十六日に東条与兵衛に託して広島書の書肆井筒屋末田勝二郎正勝(10)に送付された「歌がたり」は、間違いなく巻一の原稿である。十月十九日には正勝からの意見が齎され、二十四日には返答を出す。この間に出版の段取りが決定したと見てよい。十一月二十六日には版下が届き、校正を済ませて返送している。奥書通りであれば一年前の天保十三年十一月に完成し、間もなく刊行されたはずの巻一は、ちょうど一年後でまだ版下校正の段階だったということになる。ましてや、「天保のとをまりよとせのかなな月ばかり、ゆふ日にはかにかきくらししぐれふりきたる窓のもとに、あはたゞしく事を、

へぬ。藤原芳樹」と自ら奥書をものして、天保十四年十月成立を標榜する巻二は、それこそ影も形もなかった。

天保十五年（弘化元年）、弘化二年の日記に関連事項はなく、弘化三年に至ってまず正月二十七日、安芸国山県郡加計村の佐々木三郎右工門へ鮎の小判漬の返札を送る便に井筒屋への手紙を託して、「歌がたりのこと」を書き送る。そして四月十二日、広島から「歌がたり初編三十冊」が届く。五月十八日、長崎へ向かう日野良蔵に託した「歌談初篇十冊」は、先に取り寄せた三十冊の一部であろう。閏五月六日に届いた諸平の書状には、読後感と共に、二月頃に書肆から『寄居歌談』が届いていたという貴重な情報が盛られている。「初編（篇）」は巻一に該当するから、弘化三年の早い時期に確かに刊行されていたのは巻一のみであったと判断せざるを得ない。八月二十日に『寄居歌談』の追加分七十冊を広島から取り寄せ、その後周防福川の福田長蔵に託しているのは、先の日野良蔵の場合と同様、買い上げ分を知友に送って頒布にこれ努めている証拠である。十月二十五日には、萩に来た井筒屋に「歌談百冊代二百二十目」、即ち買い上げの代金を渡している。記念すべき『寄居歌談』のお披露目だからこそ、編集・出版から頒布までの経過を細大漏らさず記録しようという思いは強かったに違いない。

こうして見てくると、『寄居歌談』の各巻に備わる芳樹の端書・奥書の年月日が如何に当ててにならないかを痛感させられる。芳樹

に必要なものは、後から振り返って整然と順調に継続刊行されたように見せられるかどうか、つまり定期刊行の体裁が取れているかどうかなのであり、年月日が事実であるかないかなどはどうでもよかったのではなからうか。何らかの効果が上がると踏めば、改竄に手を染めて何の痛痒も感じない。そのような感覚は何も芳樹一人に限ったことではなく、当時の学芸界にある程度共有されていたのかもしれない¹⁾。それはともかく、順次刊行された巻一から巻三が、既に三冊本として改めて世に出ているはずの弘化三年、実はやっと巻一が出たばかりだったとすれば、巻一は天保十三年末から実に満三年余りも遅れて出版されたことになる。残念ながら、これより後の「日記」に巻二以降の刊行を明示する記事がなく、巻三が本当に出版されたのはいつなのか、まるで見当がつけられない。もし巻一と同程度の遅れが生じたと仮定すれば弘化四年（二八四七）頃か。いずれにせよ巻三の出版が遅れば擱筆の時期も自ずと後ろに繰り下げられるわけで、そこから起算される芳樹の広島登壇も、文政八年より前という目安を文政末年頃にまでずらして考える必要が出てくる。

『寄居歌談』の成立時期という副次的な問題にいささか拘泥しすぎたかもしれないが、事実か否かを厳密に捉える現代の学者とは根本的に発想を異にする芳樹の融通無碍を副産物として確認しつつ、筆を先に進める。

文政年間に芳樹が京坂や和歌山を拠点としたことは前述したが、この頃の「日記」は、文政九年（一八二六）の一時期を除いて伝存しない。代わりに、遊学費用の援助を仰いだ周防国吉敷郡大道村の大庄屋格上田家の当主少藏光陳（号堂山¹²）や養子五郎右衛門光逸等に宛てた芳樹書簡が残る。やはり吉田祥朔氏の筆写にかかる「近藤芳樹書翰集」（外題は「近藤芳樹書牘集」）一・二（山口県文書館吉田樟堂文庫蔵）がそれだが、幸いに上田家の子孫に当たられる広島市在住の岡本みよ氏が吉田氏の依拠した原簡を所蔵しておられ、その一部の翻字を『近藤芳樹の手紙¹³』に掲載された。これらにより、「日記」のみでは不明だった状況が明らかになる。本居大平の養子と送った文政七年（一八二四）十月二十九日付書簡に、芳樹が学問上達と拠点形成という根本的な問題に直面していた事実を証する記載がある。「蜜事¹⁴」と表題を付すからには、宛先の「上田御兩人様」、即ち堂山と養子光逸以外には決して知られたくない芳樹の本音が述べられていると判断してよいのであろう。実際、芳樹が和歌山で寄宿している高橋勝房¹⁵が、大平よりの使者岩橋大膳¹⁶に対しては「私より養子之事杯相談仕候而ハ、私方ニ滞留仕らせ候事、全本居家之養子之料ニせしが如く聞えて、良樹国許へ対しても何とこや押つけが

ましければ、此御相談ハ私よりハ不得仕、他人を以て被申入候へ。」と、直接の介入を避けるかのような返答をしながら、芳樹本人には「実ハ養子ニもなりくれ候へバ、此方迄大慶無此上事なり。節角過ル六月比より滞留させたる甲斐もありといふ物也。併強てハ拙者よりハす、め不申候。拙者より進む時ハ、彼養ふて置て我儘にすると国許杯へも聞えまい物でもない二付、兎も角も思案有度事也。」などと、恩着せがましい言辞を弄したことを記録したり、同席して芳樹より相談を受けた木村豊¹⁷の、「人之事故如何とも難申候得共、養子ニなり候ても悪しき事トハ思ハれず。」という当り障りのない返事の裏に、「少生此両三年已前よりハ至而学文も進ミかたちニ御座候故（是ハ自賛スルヤウナレドモ、カクイハネバ訳ガ分リ不申候。——以上割書（引用者注））、後々国許にて之自分之学文之邪魔にも可成かとの下意」を看取したりと、この書簡には親交を深める友人たちに対する辛辣かつ不遜な観察と感想とが満ちていて、全面的な支援を受ける上田家の人々以外には決して漏らせない記述だったはずである。そのような経緯を説明した後、本居家に養子として入ることを躊躇する「少生が胸裏」が語られる。

小生、更ニ養子ニなり申候心底ハ無御座候。大家故ニ養子ニなり候ても恥しからずと申候。一通りハ左様ニて候得共、小生が心にハ、大家故猶以なりがたく奉存候。まづ本居家ハ宣長先生・大平先生二代共ニ甚大物ニて、御案内之通、世上之風聞も

宜しく、古書などの研究も是に及人ハ無御座候。其家へ養子二なり候て家をはづかしめ候時ハ、天下の大笑ひとなり、又相応二持こたへてかつ、後をつぎ候時ハ、少生いか計精研仕候学文ニても、全く父祖之余光とより外申人無御座候。又宣長・大平両先生ニ立まさる事をいたし候程二候へバ、独立して天下の大物也。又〔岡本氏著は「又」字を欠く〕なまゝ二て養子二なり候へバ、いか程招待にあひ候而も、良樹ハ独立之力なき故、数百里へだ、りし若山へ養子二行たりと、世口に係り候はんも〔岡本氏著は「も」の下に「甚」字を入れる〕面目なし。彼是いかゞ敷数条御座候故、一生谷の埋木と朽果候而も、人の土の上にハおひ出申間敷覚悟ニ心底ハ決定仕〔岡本氏著は「仕」字を欠く〕候へバ、まづ否とも諾とも不申して聞流しゐ候。〔以下略〕

本居家という国学の大家に養子入りすることの損得を芳樹なりに天祥に掛け、学者としての「独立」を第一に考慮した場合に、本居家を継いで「宣長・大平両先生ニ立まさる事」ができなければ結局学芸界から冷笑を浴びせられ続けることになるという状況判断が生じるのは当然のこと、「人の土の上にハおひ出申間敷覚悟」の固い芳樹は、十分に学問の力を高めて、他者の影響力が浸透していない土地に拠点を築きたいという思いを強めたようである。

養子入りを断ると決意してからは、如何に大平の機嫌を損ねない

ように和歌山を辞去するか、具体的にはどこに身を置いて学問を継続するかが芳樹の直面する問題となる。

〔前略〕さて引退申二付而ハ、ツイ大坂・京あたりへ引退候時二ハ、若山之引受あしく御座候故、親父が病氣とか、母が気分相とか申候而、一応国許へ引取可申哉。尤国許へ引取候而も、田舎二居候而ハ学文出来不申、何卒御世話を蒙りて、萩表へでも罷出、館中之古書を借てなりとも学文仕度奉存候。漢学之方、独学ニて未熟ニ御座候故、萩ニてハ四五年左様之事学文可仕哉、亦ハ広島・九州辺へでも学文ニ可參哉と奉存候。いづれ三十四五才マデハ書生也。学文のミ可仕奉存上候。〔中略〕大家之相続ハ悪キものニ御座候。それも京撰ニて養子二なり候事なればよろしく候也。若山ハ片辺ゆゑ猶以不好奉存候。前断〔岡本氏著は「断」を「段」とする〕之趣、能々御勘弁被遣、萩とか山口とか九州とか長崎とか広島とか、いづくにてもしづかに学文可仕所をも御世話蒙度奉存上候。凡古学歌学之大概筋立之事ハ分り申候故、是よりハ辛抱して研究するにある事故、京撰などの如き騒がしき所ハ悪く御座候。其上、前条之如く国許故障も申立にして若山引退候而ハ、京撰ニの候而ハ若山へ之聞えあしく候なり。此段よく、御勘考、早々御答奉待上候。〔以下略〕

京大坂に引き上げるのでは大平と一門に申し訳が立たない。かと

いって周防の岩淵では学問ができない。学問の基礎は固まっているので、騒がしい京大坂でわざわざ修練する必要もなく、萩城下か、山口、長崎、広島あたりで学問がしたい。については上田家のお世話を蒙りたい。いささか虫のいい要求ではあるが、文政七年当時の芳樹の現状認識は頗る現実的かつこまやかで、その気働き巧みさには唸らざるを得ない。しかも、結果的には京坂と国許を往来しつつ数年を経ることとなるので、大平への配慮もどれ程のものであったのか疑わしく、このようないい意味での拘りのなさ、悪くいえば節操のなさが芳樹の持ち前だったかと思われる。そして、この時点で広島は芳樹の脳裏に浮かぶ拠点の一つであり、まだ現実には何ら足掛かりを有していなかったこと、上田家の援助がなければ何事も進まないのが現状であったことは間違いない。

続いて文政八年（一八二五）二月七日付上田五郎右衛門宛書簡では、正月二十八日に和歌山を出立するに当たっての経緯をこまごまと語り、帰国のためと称して和歌山を立ち退いた旨を報告した大坂の村田春門から、「ソレハつまらぬ事也。貴様ハ今が出精の最中なるを、国許へ帰るとハさてくつまらぬく。国へ歸りてハ、直に出て来ウと思ふても出らるゝ物でハない。それよりハ、若山がキラインら当地ニ滞留セヨ。当地がイヤなら京師へ出よ。」と引き留められた。それでも「一応八国へかへらねバ若山へ之義理立不申段」を述べる芳樹に対して春門は、「それハ兎も角も仕方有べし。貴様を今

国へかへすハあたり事也。」と重ねて帰国を思い止まるよう説得する。また、「大坂にて私を鼻肩仕候人々」も頻りに大坂滞留を勧める。そのような状況を縷々説明した上で芳樹は、「国へかへりたる所が在郷ニゐてハ出来ぬ事、瀨城か広島か、どこぞへ行かねばなるまいと奉存候処、人々左様ニ申候而とめ候故、又浪華へとまり可申かと奉存候。萩府・広島杯へ之志ざしハ、上方ニゐてハ若山へ濟ぬ故の志ニ候処、村田氏達而とまれと被申ハ、是も少生をいかにもして取立見ん心なるべし。」と、揺れる思いを吐露する。ここでも広島はあくまでも大平への申し訳のための消極的な選択肢の一つに過ぎず、芳樹の心は京坂に強く惹かれたままであった。

上方に留まるにせよ、郷里以外の西国筋のいずこかに拠点を構えるにせよ、上田家の全面的な支援を仰がなくては芳樹の学問と生活は成り立たない。芳樹の頭の中に広島という土地が候補の一つとして存在していたのは確かとしても、この時期に広島に居を定める見通しは全く立っていなかった。

四

文政十三年（十二月十日）天保と改元。一八三〇）六月、京に滞在中の芳樹に新たな出会いがあった。安芸国山県郡壬生村（現在の北広島町）の神職井上頼定（天明五年（一七八五）生、慶応二年（一八六六）没、八十二歳）である。頼定以降の井上家歴代が壬生

村で手習塾を営み、地域の文化活動の中心的役割を果たしたことは、

鈴木理恵氏の著書『近世近代移行期の地域文化人』¹⁷⁾の中で井上家伝来の史料をもとに詳細に述べられており、特に頼定が和歌・狂歌・俳諧などに手を染め、国学をも修めるほどの人物であったことから、近世文学研究においても誠に有意義な情報を得られるのである。この時の頼定の日記が井上家に伝存しており、それによれば六月十一日に同宿の芳樹と面談して以降七月半ばまで、歌会に出たり、伊勢物語の講釈を聞いたり、芝居見物をしたりと、芳樹と行動をとともにすることがたびたびあったという（鈴木氏著書二八五〜二八六頁）。そして、翌天保二年二月、折から山県郡加計村（現在の安芸太田町）長尾神社の佐々木日向守盛徳の世話になっていた芳樹は、同月二日付で「何卒広島に皇国学を起さまほしく奉存候ゆえ一面会を請う旨を記した書簡を頼定に書き送ったらしい（鈴木氏著書五六頁。他数箇所においても同じ指摘あり）。

鈴木氏による芳樹書簡の引用は、この一節に限られている。芳樹がどのような文脈で「何卒広島に皇国学を起さまほしく」と述べたのかを何としても知りたく思い、広島大学大学院教育学研究科の鈴木氏に問い合わせたところ、鈴木氏は当該書簡の複写と関連史料を提供して下さいました。全文の翻字紹介はいずれ鈴木氏によってなされるものと思う。本稿では芳樹に関する部分のみの引用に留めるが、貴重な史料をご提供下さり、さらには引用のご許可を下さった鈴木

氏に、心よりお礼申し上げます。

貴墨辱拜誦仕候。何角御多用之筋も御坐候而、御出も被成ま敷御様子、遠路二而ハ御坐候なり、御尤之御事と奉存候。乍併もし御閑暇も枉て御来臨奉侍候。拜誦之上ならでハ御相談も仕ま敷奉存候。但是ハ何卒広島に皇国学を起さまほしく奉存候ゆゑ也。日州より承り候へバ、彼府之方ハ貴々様御案内もくハしき御様子、いづれ日州も力のかぎりハ心配仕候へ共、兎角御相談も仕まほしきやうニ申ひ候。〈以下略〉

これ以前に芳樹は頼定に加計へ来るよう誘いをかけ、断りの返事を貰っていた。それに対して、再度説得を試みたのが本書簡である。直接会って「広島に皇国学を起す方策について相談したい」、「日州」即ち日向守盛徳から、あなたが広島状況に詳しい旨聞き及んでいる、彼もいろいろと考えてくれていたが、ともかくあなたと相談したいといっている。文面の主旨は大凡以上のようなものである。

この書簡とほぼ同時に頼定のもとに届いたと考えられるのが、二月三日付井上頼定宛佐々木盛徳書簡である。恐らく芳樹が盛徳に口添えを頼み、盛徳が別簡を仕立てて芳樹書簡とともに発信したのであろう。芳樹書簡を補う内容を有するので、関連する部分を以下に掲げる。

〈前略〉御社方御普請被成候由、定而御繁多と奉察候。尚又先達而も御尊申上候通、芳樹先生御事、于今当方御逗留被下候間、

御寸隙も御座候ハ、御出役奉待入候。昨年貴所様御上京之節、京都にて如何様御咄被成候由、広島辺ニ少々被成御逗留、皇国之学ヲ事解弘度思召も御座候趣、就夫ニ貴所様ニ御咄も数条御座候由、尚又京都にて御頼之品相調、御持下り被成、彼是ニ付何分対面致度様御申被成候間、どふぞ、一夜限ニなりともちらと御出役奉待候。先生御事も当方ニ長々之御逗留は御六ヶ敷御座候由ニ候間、何分御多用之御事にて可有御座候へ共、得斗御考御御出役之程、祈申事ニ御座候。(以下略)

前年の文政十三年の上京の節、頼定は芳樹と会談し、広島島の辺りに滞在して「皇国之学」を広めたいとの芳樹の存念を聞かされていた。さらに芳樹は、何かは分らないけれども、京都で頼定が希望した品を調達し、わざわざ加計まで持参していた。そのサーピス精神たるや大変なものであるが、そのことを盛徳から殊更にいわせるあたり、悪くいえばいささか恩着せがましいところも感じさせる。頼定依頼の品を遠路運んで加計まで来たと知らせれば、壬生の頼定も感激して駆け付け、盛徳ともども盛んに談じて広島での活動の道筋が容易につけられると芳樹は考えていたのであろう。ところが、頼定は多忙を理由になかなか動こうとしない。「先生御事も当方ニ長々之御逗留は御六ヶ敷御座候」とは、加計ばかりにずっと居るわけにはいかないと、盛徳への遠慮とともに忙しさを強調する言葉を芳樹が口走っていたのを耳にした盛徳が、頼定の重い腰を上げさせるた

めに書き込んだ文言であろう。芳樹があくまでも頼定との会談を望んだのは、広島での講筵を成功させるためには頼定の持つ人脈が不可欠だとの判断が芳樹にあったからであろう。以上は盛徳のもとを去ってからの旅程が確定していたと想定した場合の解釈である。もし確定していなかったらどうか。その場合は、加計を辞去して以降の滞留先として頼定を当てにしており、頼定と会って彼をその気にさせ、是非壬生へと誘ってもらわなければどうにもならないという、切羽詰った即物的な理由のほうが先立っていた可能性を考慮する必要がある。

ともあれ、頼定と直接会って面談したいという芳樹の希望は、二月十九日に盛徳とともに頼定のもとを訪れ、同月三十日まで滞留することで実現した(鈴木氏著書二〇六頁)。自分の国学を広めるには、まず他者の学問が及んでいない土地を選び、そこに人脈を持つ有力者との関係を築き、京坂で幅広く活動する国学者という印象を強烈に与え、しかも彼らへの奉仕に手を抜かないことが肝要であると、芳樹は本能的に理解していた。

五

かくて、第一節で触れた、天保二年四月の梅颯らを迎えての源氏物語講釈となる。「梅颯日記」四月二十四日条に、「二十四日。晴。芳樹丸てふ和学者、俗称田中新一郎、開禪丁にて源氏講釈有、聞に

行、〈以下略〉²⁰とあるのが吉田氏の抛った記事であるが、「梅颯日記」六月十三日条にも「十三日。晴。〈中略〉田中晋一郎芳樹磨訪。」²¹とあり、この間、芳樹の講釈とは明記されないけれども聴講に出かけたと思しき記事も散見して、芳樹が梅颯と何度か会したのは間違いない。二月末まで壬生の頼定のもとにいた芳樹が、それまで全く頼家と接触を持たないままいきなり広島に出て、初対面の梅颯の興味を引き付けられるとは到底思えないから、第三節において確認した、芳樹が上田家に対し京坂以外の土地で学問をするべく世話焼きを願った経緯と、第一節の冒頭に掲げた『寄居歌談』巻三の記事内容とを勘案すれば、広島での足掛かりを得るために堂山が芳樹を紹介した相手としては、既に文化年間より交渉を持ち、堂山が天保三年（一八三二）に大道に建てることになる「蔽島六社大明神碑」の碑文撰文を依頼していた²²、広島学の学芸界の耆宿として仰がれる頼杏坪こそが最もふさわしく、梅颯は義弟の紹介で聴講する気になったと捉えるのが一番自然であろう。ただし、文政七年末から八年初めにかけての時期、京坂以外の土地のどこに拠点を築くかの見通しを全く持っておらず、また文政末年時点でお京に滞留していた芳樹が広島への思いを強く持っていたとは考えにくく、杏坪を紹介してもらって広島での活動を本気で考えるに至ったのは天保二年にかなり近接した時期だったと見るのが妥当である。天保元年七月二日の京都大地震の後、八月二十二日付の上田五郎右衛門宛の書簡で、「卜

テも学文も出来不申事故、一先紀州へ罷越、年内一応帰国とキメ申候。」と述べているところを見ると、この地震がきっかけとなった可能性もある。

ここで、芳樹の杏坪評価を知り得る天保三年九月十三日付紫髯堂（上田堂山）宛書簡の一節を読んでみたい。堂山が芳樹を介して杏坪に菓子を送ったが、杏坪から菓子が届かないとの知らせが堂山のもとに入った。堂山からその旨知らせを受けた芳樹は、間違いなく手配し、杏坪からも受け取りの返事が来たが、その書簡は「例之小生が懶墮にて、シミのすみか二（岡本氏著では「二」を「と」とする）かくれ」てしまったと述べた上で、堂山に事情を説明する。聊か長い引用となるので、適宜区切って解釈を織り込みつつ掲げる。

〈前略〉彼翁大徳之人ニも不似合と奉存候ハ、もし菓子不相達とならバ、持参したる段、国元より被仰越候ハ小生ゆゑに、まづ小生方へ、「菓子相添候由、状二ハありて実物なし。失念にてハなきか」と問ハれて、小生之答を待たる上にて国元へ被申越候而も可然奉存候。然るを何ぞや、聊かなる菓子之事故、まづ足下ニある小生ニも告ずして、数十里外之御国まで申こされ候事、決而小生がひがことを見出して国元杯へも知らせんとせらる、頼翁之たくミかと推量せられ申候。

「国元」即ち上田家から代金を受け取って杏坪宅への菓子送達を手配した芳樹に問い合わせず、直接上田家に菓子を書き送っ

た杏坪に、あえて芳樹の面目をつぶそうとする悪意を感じ取って、芳樹は憤激する。

此菓子之事ハ、御国へ彼翁被申越候段ハ一向存ジ不申候へ共、既ニ広島之某に其事をいはれ候由にて、其事聞〔岡本氏著では「聞」を「噂」とする〕候人〔金春啓助と申御役者―以上割書〔引用者注〕〕早速小生へ告而、「もし失念どもハ無之か」と申候故、右之訳申候処、「しからバ彼翁老人故、却而忘れられたるならん」と申ひ候。是も既ニ小生恨ミニ奉存候。金春ニ被申程ならバ、小生旅宿へ一寸申送られ而も、また小生方へいひにく、被存候ならバ、度々書状之取次をする宮崎やへ被申越候而もよし、縁も無き金春ニまでか様之事被申候ハ、畢竟金春といふ人、権門方へも立入候故、それら之序〔岡本氏著では「序」を「席」とする〕にも小生が事あしざま二いはせんとの巧ミと奉存候。金春ハ小生とも知音故、早速其事を小生へ通じて、頼翁之後言を何角と申ひ候。

杏坪は、芳樹の不手際と決めつけてその件を能役者の金春啓助に話した。有力者のもとに出入りする金春にこの情報を伝えて、金春があちこちで芳樹の悪口を広めてくれるのを期待したのではないかと、芳樹は推測する。杏坪のところでは恐らく杏坪に調子を合わせていたに違いない金春が、芳樹のもとでは杏坪の悪口をいうのだから、その軽薄さには唾然とするしかないが、金春にいうくらいな

ら、地元広島に滞在する当の芳樹に一言あつてもいいのではないかと、芳樹の「恨ミ」は、いささか被害妄想の気味はあるものの、人情としては尤もである。なお、「宮崎や」は広島銀山町の宮崎屋小十郎で、「日記」には芳樹の広島滞在中に万事にわたって世話を焼いてくれる人物として登場する。また、『芸州蔽島図会』の蔵版主として同書の奥付に記載される。

彼翁、徳之高キ、書之巧ミ、詩之上手なる事ハ誰しらぬ者もなく、小生とても常々尊敬仕事ニ御坐候。然其学文ハ小生とハ従来筋ちがひ之事故、さのミ度々参る用もなく、其上遠方なり、かたゞ疎遠がちながら、此度も宅へも両度まゐり、また世並やと申葉戸へ一同ニ呼れ、千歳園と申家へも一同ニ招かれ、同席も両度仕候故、左のミうとくしき事も無之、要する処ハ小生を悪るゝなり。これハ彼翁之性質にて、兎角評判之よき人ハくしぎたいよし二承り申候。

人徳並びに学識において申し分ないと評される杏坪が、実は新参者の芳樹の評判がいいのを憎んで嫌がらせをしているのではないかと芳樹は疑う。芳樹はこれまでに二度杏坪宅に出向き、『蔽島絵馬鑑』の著者千歳園藤彦や『芸州蔽島図会』の製本書肆を引き受けることになる世並屋伊兵衛の開いた宴においても杏坪と同席するなど、「かたゞ疎遠がちながら」も交友関係を保っていたのだが、結局のところ芳樹を「くしぎへくじぎたい」のが杏坪の本質なのだと呼

破する。杏坪の底意地の悪さが、巧みに人脈を作って世渡りをしてきた自信満々の芳樹の前に立ちはだかった形である。そして、芳樹の自負と杏坪の悪意がぶつかった実例を述べ立てていく。

小生杯もとより論ずる二足らぬ、贅之黄なる一書生ながら、君之御蔭を以、はじめ京撰二遊び、少々力を尽し候故にや、去年初而参り候時より広島にても評判よろしく御坐候処、去年之滯留中二頼翁より、まかる・まかすといふ二ツ之言葉之意を尋おくられ候故、小生未熟之学文にて、かの老練二答へ候事いかゞとハ奉存候へ共、彼ハ儒也、我ハ国也、もとすぢちがひ之学文故、知らぬといはんもいかゞと奉存候。則彼二ツ之語意を弁じおくり申候処、直二その語意之考之不宜段を弁じて、まかす考トカいふ書を彼翁著述致され、小生二ハ見せずして、「芳樹ハ僻説を張」などいひちらされ候事、広島之人口にかゝり申候。是等も、たとへ小生が考不宜ハ、彼翁之宜しとおもハるゝ考をまづ小生へ一応見せて、其上にて諸方へちらさるゝハよし、一向沙汰なしニ悪口まじり之〈岡本氏著では「之」を「にて」とする〉弁書を世間へ出され候ハ、全く小生を摧かんとの事也。此事も小生ハ、まづ老人といひ、大徳之人故、去年帰国之節も御噂ハ不仕候へ共、さのミニ心快くハ存じ不申。然るニ此度また一〇小生広島へ参り、去年二劣る事もなく風聞もよきを悪みて、此度ハ国元へ小生之悪を申越れ候段、あまり二いかゞと

奉存候。(以下略)

この箇所によつて、芳樹が広島の地に初めて滞在したのが「去年」、天保二年であったことが明らかとなった。山県郡加計・壬生滯留の後、間もなくのことであろう。それまでに堂山の紹介を得て杏坪に連絡を取り、四月以降の開筵の段取りについても相談していたと見てよいだろう。「まかる・まかすといふ二ツ之言葉之意」を杏坪が芳樹に問い合わせた真意が始めから芳樹を愚弄することにあつたのかどうかについては、芳樹の一方的な感想だけに、分らないとしかいいようがない。ただし、他国から広島に入り込み、恐らくは人をそらさない巧みな弁舌で評判を獲得してゆく芳樹に対し、杏坪が何らかの苦々しい思いを抱いたとしても不思議ではない。芳樹の人徳の無さ故かもしれないし、老いの度を加える杏坪の年甲斐もない嫉妬心のなせる業なのかもしれない。いずれにせよ、広島という新天地で新たな人脈を築く上で、杏坪の名声は何よりの力となるはずであり、相応の効果はあつたはずだが、杏坪が芳樹に対して巧妙に仕掛ける隠微な拒絶に、芳樹が立ち竦まざるを得ない状況にしばしば追い込まれたのも事実だつた。

後年、『寄居歌談』巻三に初めての広島開講の思い出を記すに当り、芳樹は杏坪との軋轢など曖にも出さず、杏坪のお蔭で広島学の芸界での地位を確立できたと持ち上げ、引用では省略したが杏坪の和歌をずらずらと並べてみせる。杏坪が広島における芳樹の悪評の

瀟漫を目論んだのが本当だとすると、杏坪によって広島での世評が高まったという逸話は、痛烈な皮肉以外の何物でもないが、この記事が天保五年（一八三四）に没した杏坪の目に触れることはなかった。亡き杏坪を熱烈に追慕する広島学者・文人の目を十分意識して、芳樹はこの一条を物したのである。

おわりに

まさにヤドカリそのものの芳樹が、異郷の地で知己を得、地方の学問好きをその気にさせて、その援助を受けつつ学問の確立を図るには、後世の我々の目から見れば不自信を抱かざるを得ない軽薄な口舌や方便としての虚偽を駆使する必要もあったのだろう。また、著作そのものの成立時期という、現代の学問の常識からいえばその正確さは根幹に関わるはずの事柄に、その場で捏造に近い作為を施すことに何ら後ろめたさを感じないのも、彼の特徴の一つであったらしい。そして、現実としては憤懣やるかたない仕打ちを受けたとしても、著作を公表するにあたっては恩義への感謝だけを表に立てるのが、少なくとも芳樹という国学者の、処世観に根差す行いなのだった。『寄居歌談』の一つの記事の真偽を起点として芳樹の「日記」や書簡のあれこれを通じてきたが、近世国学者の生み出した業績の背後に息づく、どこかおかしくも必死な、本音と建前の相克の様に、疎ましさとともにある種の親近感を抱かずにはいられない。

注

- (1) 久保田啓一・蔵本朋依氏「山口県文書館蔵『近藤芳樹日記』翻刻」(一) (八)『内海文化研究紀要』三三三号(二〇〇五年三月) (四一)号(二〇一三年三月)。
- (2) 引用は山口県文書館吉田樟堂文庫蔵版本による。以下、資料の引用に際しては、適宜漢字を通行の字体に改め、句読点・濁点・かぎ括弧・ハマヅなどの注記を補う処置を取った。
なお、齋木泰孝氏(翻刻)近藤芳樹著『寄居歌談』巻一(四卷(承前))〔安田女子大学大学院文学研究科紀要』一〇集(二〇〇五年三月) (一三集(二〇〇八年三月))がある。
- (3) 揖斐高氏『寄居歌談』論「地方からの幕末和歌批評」(『国語と国文学』七〇巻一、一九九三年一月、のち同氏『江戸詩歌論』(汲古書院、一九九八年二月)に収録)。
- (4) 影山純夫氏「国学者近藤芳樹の交友―国学者、儒者を中心に」(『日本文化論年報』四号、二〇〇一年三月)。
- (5) 宇佐美喜三八氏『近世歌論の研究 漢学との交渉』(和泉書院、一九八七年一月)第十章「近藤芳樹の歌論」第一節「寄居歌談」の成立について。
- (6) 注(3)と同じ。
- (7) 以上六項「日記」第四冊に収録。「山口県文書館蔵『近藤芳樹日記』翻刻(六)」(『内海文化研究紀要』三九号、二〇一一年三月)所掲。
- (8) 以上六項「日記」第五冊に収録。「山口県文書館蔵『近藤芳樹日記』翻刻(七)」(『内海文化研究紀要』四〇号、二〇一二年三月)所掲。
- (9) 以上三項「日記」第五冊に収録。「山口県文書館蔵『近藤芳樹日記』翻刻(八)」(『内海文化研究紀要』四一、二〇一三年三月)所掲。
- (10) 『寄居歌談』巻二に、正勝に至る末田一族の、あくまでも国学者として

の面を称揚する記事がある。文中、『寄居歌談』出版の功に一切触れないのは、さすがに内輪褒めの気配が濃くなるのを避けたものか。それでも国学者としての精励に筆を及ぼすことで、刊行を引き受けてくれた正勝への謝意は、間接的ながら十分伝わったはずである。

- (11) 例えば、版本『樺島浪風記』の序跋年次の改竄についての考証が、岡中正行氏「中島広足著述攷―『樺島浪風記』について―」（『帝京女子短期大学紀要』二二号、一九九二年一月、吉良史明氏「中島広足『樺島浪風記』の変容―幕末国学者の文芸と思想―」（『国語国文』八〇巻四号、二〇一一年四月）、同氏「中島広足『樺島浪風記』成立攷」（『鯉城往来』一五号、二〇一二年二月）において展開されているのが参考となる。

- (12) 上田堂山の文事を代表する『延齡松詩歌集』の編纂と一族の活動については、野口義廣氏「上田堂山と『延齡松詩歌集』の世界―風雅に生きた地方文人一家の生涯―」（『山口県立大学国際文化学部紀要』四号、一九九八年三月）他一連の論考に詳しい。

- (13) 私家版、二〇一〇年六月。

- (14) 以下、書簡の引用は、山口県文書館吉田樟堂文庫蔵本の本文に拠り、岡本みよ氏「近藤芳樹の手紙」との重要な異同については、岡本氏著「『蜜』を『密』とする』のように注記を加える。なお、引用の方針は注(2)に同じ。

- (15) 高橋勝房と芳樹の交流については、小野美典氏「近藤芳樹『たのむのかり』の成立―写本二種と版本を手掛かりに―」（『桜文論叢』八〇巻、二〇一一年九月）に言及がある。

- (16) 木村豊平に関して、注(15)小野氏稿に詳しい。

- (17) 塙書房、二〇一二年二月。

- (18) 頼定とその周辺の文芸活動については、千代田町役場編集発行『千代田町史 近世資料編（下）』（一九九〇年）『千代田町史 通史編（上）』

（二〇〇二年）に記載がある。

- (19) 芳樹の加計村における活動に関しては、小倉豊文氏編『芸州加計佐々木氏加計閨屋史稿』巻上・中・下（版權者加計慎太郎氏、一九七〇～七一年）や加計町編集発行『加計町史 資料編II』（二〇〇二年）参照。

- (20) 木崎愛吉氏・頼成一氏共編『頼山陽全書 附録 春水日記 梅慶日記』（頼山陽先生遺蹟顕彰会、一九三二年）八二～八三頁。木崎氏による注記は省略した。

- (21) 『頼山陽全書 附録 春水日記 梅慶日記』八二五頁。同書には「芳樹磨」とあるが、「磨」は「磨」の誤植と判断して改めた。

- (22) 岡本みよ氏「敵島六社大明神碑―頼杏坪と上田堂山の交流―」（『雲か山か』五八号、二〇〇一年三月、財団法人頼山陽記念文化財団）参照。なお、同稿に使用された杏坪書簡群は、複写を岡本氏より拝借し、順次翻字を『鯉城往来』所収「鯉城往来雑纂」に掲載する予定である。

〔付記〕

本稿は、平成二十三年度城下町広島島の歴史講座十講の講演「国学者の活動拠点としての広島―近藤芳樹の場合―」（二〇一二年二月一日）の内容の一部を成稿化したものである。貴重な資料をご提示下さった鈴木理恵氏と岡本みよ氏に心よりお礼申し上げます。

なお、本稿は平成二十四年度科学研究費補助金基盤研究（B）「世界遺産・敵島の総合的研究―伝承・伝説の時代性―の視点から―」（研究代表者 狩野充徳氏）による研究成果の一部である。

―くぼた・けいいち、広島大学大学院文学研究科教授―